不登校児への支援
－「みんなでチャレンジ」の活動を通して－

加藤義男*　佐藤歩**　阿部幸成***

（2004年2月5日受理）

Yoshio KATOU, Ayumu SATOU and Kousei ABE

Psychotherapeutic Support for Truant Children with Non-attendance at School

Ⅰ．はじめに

不登校の子どもらへの支援にとって、「居場所づくり」ということは重要な意味をもっている。心理的・物理的な居場所が確保され、安心した状況に置かれる中で、自己洞察を深め、自己成長にむかっての歩みを踏み出すことが可能となる。それゆえに、不登校の子どもらひとりひとりのニーズにあわせての居場所を確保することは不登校児支援における重要なテーマである。

筆者らは、2001年4月、教育学部附属教育実践総合センターの中に「心理・教育相談室」を開設するに当たって、不登校児の通所支援活動（「みんなでチャレンジ」）を開始した。そして、2年間の活動の後、参加児の大半が高校に進学したことを契機として、2003年3月に「みんなでチャレンジ（第一期）」の幕を閉じた。

本報告は、「みんなでチャレンジ（第一期）」の取り組みについてのまとめである。これを通して、不登校児への支援の在り方について考察をすすめ、今後の支援の充実化に向けての一助としたい。

Ⅱ．「みんなでチャレンジ」の取り組み

「みんなでチャレンジ」は、不登校児支援を目的とする通所支援活動であり、実施主体は岩手大学教育学部附属教育実践総合センター「心理・教育相談室」である。

「みんなでチャレンジ（第一期）」の実施期間は、2001年4月から2003年3月までの2年間である。

1．取り組みのねらい

①不登校の子どもらの思いを受け止めることのできる「子ども中心の居場所」づくりをめざす。

②不登校の子どもらが、自分の思いを表現し、人間関係を広げる場づくりをめざす。

2．活動の内容

活動として、グループ活動と個別支援活動の二つを行った。

①グループ活動について

毎月1回、原則として第二土曜日の午前中に実施した。スタッフは、教育学部教員1名、教育学部

＊岩手大学教育学部　＊＊私立スコーレ高校カウンセラー、教育学部附属教育実践総合センター心理相談員（非常勤）
＊＊＊岩手大学大学院教育学研究科

大学院生２名、教育学部生４名、教育実践総合センター研究協力員１名の計８名。

グループ活動のプログラムは、毎回の活動における参加児とのミーティングで次の活動内容を決め、その後のスタッフミーティングにおいて内容を吟味・確認した。具体的な活動は、「動物公園に行こう」「体育館で運動しよう」「ボーリングをしよう」「ゲームで遊ぼう」「バルーンアートをしよう」「大学祭に参加しよう」「スケートをしよう」「お好み焼きをつくろう」「釣りをしよう」「バーベキューをしよう」「合宿をしよう」「スキーを楽しもう」等であり、戸外での身体を動かしての活動やみんなで協力して作り上げる活動などに重点をおいて取り組んだ。

②個別支援活動について

参加児のニーズに応じて週１～２回、スタッフとの一対一の個別支援活動を実施した。場所は岩手大学教育学部附属教育実践総合センター。スタッフは、グループ活動と同一である。

支援内容については、参加児及び親と話し合って決定したが、主な内容としては学習面でのサポート、心理面の相談、戸外活動等であった。

３．参加児

グループ活動の参加児は６名であり、男子４名、女子２名。開始時点（2001年４月）での年齢は中学２年生５名、17歳の男子１名。６名のうち、個別支援活動の参加児は中学生４名（男子２名、女子２名）であった。女子２名のうち、１名は2002年夏からの途中参加である。

なお、グループ活動の実施と平行して親の集いも実施し、スタッフとの情報交換や親同士の話し合いを行った。さらに、必要に応じて親との個別面接も行った。

Ⅲ．事例報告

ここでは、「みんなでチャレンジ（第一期）」の参加児６名のうち、２年間にわたって参加し、かつ、グループ活動と個別支援活動の双方に参加した３名の事例（A男、B男、C子。いずれも中学生）について報告する。

Ⅲ―１．事例１「A男」

１．支援開始にあたっての実態

(1)　不登校になった経緯

小学校５年生の時、連絡帳を忘れて担任の先生に叱られ、そのことを繰り返し他の生徒の前で言われたことが不登校になるきっかけであったと本人は話す。その後、小学校時代は登校したりしなかったりという状態を繰り返す。中学校に入学し、ほとんどの生徒がそのまま小学校からの繰り上がりのため、登校しづらくなり不登校状態になる。

(2)　問題の所在

中学校入学以来、登校することができない。同世代の子どもとコミュニケーションをとる機会が少ない。小学校時代から不登校状態であったことによる学力不足。

本人は、勉強することの意味が分からないことや、学校へ行こうとすると体調が悪くなることを訴える。

(3)　本人・親からの要望

本人からは、外に出て活動できる機会が欲しい、話し相手が欲しいという要望があった。親からは、とにかく家にいる時間が多いため、外に出て活動できる場所が欲しいという要望が出された。

２．支援の経過

(1) 一年目（2001年４月～2002年３月）

月１回のグループ活動を通して、母親との面接及びＡ男の観察を行った。当初は、ラポートを作ることを目的として、積極的に戸外での活動を行った。月１回の活動をとおしてラポートが形成され始めたころ、Ａ男および母親から「来年は中学３年になるので、週１回、勉強を教えて欲しい」との要望が出され、年度途中（10月ころ）から個別支援活動を取り入れた。

個別支援活動では、小学校６年までの算数の復習を行い、あわせて心理面の相談などを行った。このなかで、自分の悩みをメールで表現できるようになり、同時に、言葉に出して自分の意見を言えるようになってきた。自分から積極的にやりたいことを企画できるようにもなってきた。また、「なぜ勉強をするのか」について話し合った時、「勉強していると、どうしても勉強する意味について考えてしまう。考えれば考えるほど深みにはまってしまう」と言う。また、将来のことについて話し合った時、「自分は不登校になって、自分の家の犬に癒された。将来は犬の訓練所のようなところで働きたい」と言う。

(2) 二年目（2002年４月～2003年３月）

①４月～６月頃‥５月当初、修学旅行の説明会が学校であったが行けなかった。そこで、スタッフと事前に、修学旅行時のＡ男の役割が何であるか、何をしたら良いかを確認し、不安点について話し合った。また、学校の担任と、修学旅行での担任との個別的な活動を約束することが出来、担任に対する好意を持てるようになってきた。修学旅行中、友達と「なぜ勉強するのか」について話しあったとのことで、その時、「友達はそれほど深く勉強に対する意味を考えておらず、自分は考えすぎなのではないか」と感じたとのことであった。担任との個別的な活動をとおして、担任に対して「あの先生は、自分のことを分かってくれる」と好感を持つようになってきた。親によると、修学旅行に行く直前は吐きそうになっていたが、帰ってきた時はとてもすがすがしい顔で帰ってきたということであった。しかし親としては、修学旅行を機会に学校側の継続的な支援を期待していたが、その後の連絡がなく、少しがっかりした様子であった。

この時期は、自分のなかに湧いてくる不安を漠然とした形のままで終わらせるのではなく、自分自身でどのように解決したら良いのかを考えることができるようになってきた。しかし、それを行動に移すこと（例えば、学校に行って担任と話し合うこと等）はできなかった。学習面では、自分から教科書を開こうとせず、「勉強するのに意味があるのか」「勉強しても将来役に立たない」と言って、勉強する意欲を見せなかった。そこで、とりあえず一日30分の勉強時間をとることを約束させ、まずは答えを見てもよいから宿題を必ずやってくるようにしたり、今やっている問題集をとにかく一通り終わらせ、達成感を持たせるようにした。そうする中で、Ａ男自身が疑問に思ったことも指摘できるようになり、何が分かっていて、何が分からないかを理解しながら、勉強を進められるようになってきた。

この当時親からは、イ）学習面での遅れが気になっていること、ロ）高校進学に当たって受け入れてくれる高校があるかどうか、ハ）個別指導を週１回から周２回ほどに増やして欲しいという意見等が出された。

②７月～10月頃‥学習面では、Ａ男の興味がある単元に関しては、自力ですすめていく様子がみられた。ある程度進んだところで、確認の意味を含めて復習することを行い、進み具合がどの程度のものであるのかを確認することとした。以前やった問題を確実に理解し、それを応用して問題を解くことができるようになってきた。進むペースも１単元一時間以内で終わることができるようになった。この頃から、自分の学習に対するペースをＡ男自身で理解し、どうすればよいかを

考えて実行することができるようになってきた。A男自身で予習することができるようになったことで、学習の進み具合が早くなり、本人から「もう少し進み具合を早くして欲しい」という希望があったため、予習の量を少しずつ増やしていくこととした。しかし、予習の量を増やしたことがA男にとって少し負担になり、最後までできていなかった。そこで、学習のペースを見ながら量を増やしていくことにして、学習のペースに対して焦る必要はないことを伝えた。復習をやっていると新しい分野に進むことが遅くなってしまうため、A男に自主学習という形で行ってもらうことにした。予習では分からないものだけをピックアップし質問してもらい、学習の場では進み具合を早くすることができるようになってきた。

心理面では、過去の嫌な出来事を自分自身の問題として受け止め、前向きに考えることができるようになってきた。これは、ライフラインを記述させた時、「現在、人生を楽しんでいます」と述べていることからもうかがえた。また、本人自身が日常生活に対する物足りなさを感じだし、「家ではギターやテレビがあって、一人で勉強しようとしても集中する時間が少ない。卒業するまで中途半端で終わらせたくない。不登校のきっかけがどうのこうのと言っておられない。これからどのような人生を送るのかは自分しだいだ。これ以上、親に迷惑はかけられない」と話してきた。そこで、スタッフから「学校に行けば今の生活が変化するのでは？」と問いかけると、A男自身のなかに、今まで考えもしなかった「学校に行ってみたい」という気持ちが湧いてくる様子であった。しかし、実際に学校に行くことを考える段階になると「胃が痛くなってきた」と言っていたため、体調の変化に気をつけながらA男の意思を尊重して学校に行ける状態を整えることとした。具体的には、イ）学校で現在使用している教科書、学級での役割（係り等）を調べること、ロ）登校するにあたってのスケジュール、登校日を決めることなどであった。しかしその後、A男から「今のところはまだ踏ん切りが付かないから登校できない」という気持ちが示されたため、親と話し合いつつ、様子をみながら先の見通しを立てることにした。

③11月～3月‥高校入試が近づく時期になると、A男は自主的に学習に取り組む姿勢が見受けられるようになっていた。自分の学習がどれだけ進んでいるのか気になり、学校に登校し、相談室において期末テストを受けることができた。

高校入試では、自分のこれまでの経過（不登校になった経緯等）や高校で何をやりたいか、将来どのような仕事をしたいかを面接においてはっきりと話すことが出きた。

「みんなでチャレンジ」のグループ活動においても、積極的に意見を出すことができるようになり、また、周りの参加児を気遣って自分から話しかけるという場面も多く見受けられるようになってきた。

3．A男についてのまとめ

2年間をとおして、支援開始当初の月1回のグループ活動への参加から、週2回の個別支援、週2回の学校の相談室登校へと発展していった。個別支援活動においては、支援開始から終了まで、学習面と同時に心理面に対しての支援を多く行なってきた。そのなかで、学習面での伸びや心理面での安定がみられ、高校へと進学していった。

Ⅲ―2．事例2「B男」

1．支援開始にあたっての実態

(1)　不登校になった経緯

小学校4年生の時、隣席の同級生に悪口を言われて行きたくなくなったと本人は話す。小学校5年

生になり担任が変わり、悩みやいじめ等の問題に積極的に対処してくれることで登校するようになった。しかし、6年生になり、嫌な事がある度に小学校4年生の出来事を思い出し、いじめなどの問題に立ち向かっていこうとせず、「4年生の時休んでいたから、嫌な事があれば休めばいい」という気持ちになり、不登校を繰り返す。中学校になり、クラスにある程度のグループができており、同級生のなかにどうやって入っていけば良いのか分からなくなり不登校状態となる。

(2) 問題の所在

登校出来ない。コミュニケーションが上手くとれず、相手の質問に対して自分の意志表示をすることが難しい。小学校4年生より不登校を繰り返してきていることからくる学力不足。

(3) 親からの要望

外出する機会がなく、同世代の子どもと関わることがほとんどないため、他人と関わる機会を作って欲しい。自分の意思を言葉で表せることができるようになって欲しい。

(4) B男の実態

ほとんど外出することがなく、バス等の乗り物にも一人で乗った経験がない。他人と会話をすることもほとんどないため、意思表示をすることが難しい。自分に対する他人の表情や口調等に敏感に反応し、あとで自分の行動・言動を振り返って落ち込むことが多い。

2．支援の経過

(1) 一年目（2001年4月～2002年3月）

月1回のグループ活動を通して、母親との面接及びB男の観察を行った。当初はスタッフの質問に対してうなずくだけであり、自分の意思をきちんと表現することことができなかった。親から、「今のB男のとって、月1回のグループ活動に行くことが精一杯である。グループ活動に参加する前に、その日の自分の行動をシミュレーションしてからでないと行くことができない」という話を聞き、一年目は本人との十分なラポート形成を目的として関わっていった。

一年目の終わり頃、親から、「中学3年になるので勉強も教えて欲しい」との要望があり、本人も意欲を示したので個別支援活動も平行して行うこととした。

(2) 二年目（2002年4月～2003年3月）

個別支援活動をすすめるにあたって、学習をどのように行っていくか、今悩んでいるのはどのようなことかを話し合った。B男から「勉強のことよりも、友達をつくり、他人と関わりたい。しかし、うまく集団に入ることが出来ない。」という悩みが出された。

B男の悩みをより具体的に話し合うため、ライフラインを書いてもらうことにした。不登校になったきっかけやその時の感情を記述する場面では、自ら書くことができなかった。しかし、質問をするとその時の状態をはっきりと覚えており、詳しく説明することができた。小学校での不登校に関しては、「理由もなく、何か嫌なことがあったら逃げていた。休めばいいやと思っていた。今思えば、学校に行けばよかった」と話す。さらに、「学校はつまらないと思う」「勉強をやりに行くだけであればよいが、集団の中に入ると疲れる」と話す。

学習面では、自信のなさそうな感じが見受けられたが、一生懸命やろうとする意欲も見受けられた。高校入試では、作文、面接とも自分なりに記述し、話をすることができ、「少し自信がついた」と本人は話していた。

支援期間終了間際には、中学校の相談室に自主的に登校することが出来るようになり、卒業式には学校に行って卒業証書を受け取ることが出来た。

3．B男についてのまとめ

一年目は、月１回のグループ活動において、活動には一緒に参加していたが、B男からスタッフや他児に話しかける様子はほとんど見られなかった。しかし、二年目の４月からスタッフとのメールのやり取りをきっかけにして、少しずつB男の悩みを打ち明けてくるようになった。個別支援活動に関しても週１回から週２回に増やして欲しいと要望するなどの積極性がみられ、他人とも積極的に関わろうとする姿勢が見られるようになってきた。

卒業に向けての写真撮影の際、B男は学校に行き写真撮影に参加することを決心した。その時も、「チャレンジにくると自分に自信が持てる。できればチャレンジに行って話をしてから写真撮影に行きたい」と話し、スタッフとの関わりを通して少しずつ自信をつけていった。そして、二年目の後半には、自主的に学校の相談室登校をすることができるようになり、高校にも合格することができた。

Ⅲ―３．事例３「C子」

１．支援開始にあたっての実態

⑴　不登校になった経緯

小学校時代は問題なく過ごす。中学１年の時、いじめにあう。さらに、ボランティア活動に関する授業があった時、同じ班になった生徒と合わなくなり、また、ボランティア活動に対しても「どうして大人が決めたことに対して従わなくてはいけないのか」という考えを持ち、これらが複合して学校に行きたくなくなり不登校となる。

⑵　問題の所在

登校することができず、不登校になってから自宅周囲を歩くことができない。高校に進学したいと言う気持ちはあり、勉強に対しての意欲が見られる。同世代の子どもと遊ぶ機会がなく、上手にコミュニケーションを取ることが難しい。

２．支援の経過

月１回のグループ活動をとおして、親との面接及びC子の観察を行った。当初はスタッフの顔色をうかがいながら話している様子がみられ、ラポート作りを大切にした。

二年目に入り、C子自身が個別支援活動に積極的に参加しだした。６月ころ、C子から個別支援を週１回から週２回にして欲しいと言う要望があり、２回に増やすことになった。

学習面では、宿題をきちんとやってくると同時に、自分の分からないところを確認することができていた。計算問題の時、きちんと計算過程を書いて答えを導き出せるようになることを目標とした。学習に対する意欲が見られるが、学習進度に関して焦っている様子も見受けられたので、一つ一つの単元をきちんとこなすことの重要性を話すとともに、焦らず学習するように励ました。できない問題をやろうとする意欲を大切にするとともに、その前に基礎ができていなければ難しいことを伝え、順序良く単元をクリアしていくことに目を向けられるように励ました。

心理面では、他児とのコミュニケーションの取り方について支援を行った。例えば、夏休み中のことを他児と一緒に話をした時、他児が話していると、C子はあまりその内容に興味がないのか参考書を取り出し学習を始めていた。他児が話す内容に対して「C子はどう思う？」と質問をすると、質問内容とは関係なしに、C子自身の夏休みのことを話しだす場面が見受けられた。「話をする態度」「話を聞く態度」が今後、同級生と話す場面になった時重要な意味を成すものであり、興味がないから自分の好きなことをやるのでは今後の人間関係において苦労することが予想された。そこで、ライフラインを記述させることで「話をする態度」「話を聞く態度」についての大切さに気付くように支援を行った。

二年目の後半には、自分から学校に行って進学の意思を示したりして、積極的な行動が見受けられるようになってきた。

3．C子についてのまとめ

友達と遊びたくても遊べず、行く場所もなく、何も目的がないまま家で過ごしていたC子が、2年間の支援を通して月1回のグループ活動への参加から週2回の個別支援活動への参加へと発展していった。そして、中学3年の後半には、週1回学校に行き、担任と話をすることができるようになり、高校へと進学していった。

Ⅳ．考察

1．「居場所」の重要性

不登校児を対象に、「子ども中心の居場所」づくりを目的として「みんなでチャレンジ」の活動を行なってきた。活動に参加した児童は、小学校時代から不登校状態になっていたり、中学入学後ずっと不登校になっており、当初は月1回の活動に参加するのが精一杯の状態であった。そのため、当初のグループ活動は、どの子にも無理のない活動内容を決め、参加しやすい状況づくりから始め、ボウリングやスケートなど必ずしも集団体験をしなくてもよい場を作ることを心がけた。

そして、一年目の10月頃、グループ活動が軌道に乗り始め、スタッフと子どもとのラポートが形成されてきた頃、一人の参加児から「勉強を教えて欲しい。個別の相談に乗って欲しい」という要望が出され、グループ活動とは別に、週1回～2回の個別の学習・相談の場を作ることになった。この個別支援の場では、学習面でのサポートと同時に、積極的に外に出て子どもの興味・関心を引き出すとともに、悩みなどの心理面への支援の場とした。

以上のような「みんなでチャレンジ」の活動は、不登校の子どもたちにとって、定期的に通うことができる物理的な場を提供したことにとどまらず、スタッフや他児との人間的なつながりの場としても重要な意味をもち、「居場所」としての有意義な機能を果たすことができたと言える。この点からみて、不登校児支援における「居場所」づくりということは大変重要なことであると考える。

2．子どもの実態に応じた場の必要性

参加児童の当初の様子をみると、必ずしもグループ活動が適していたとは思えない子どももいた。支援開始の当初はグループ活動のみの実施であり、それだけでは児童個々の実態にあわせた場を十分に提供できなかった。途中から個別支援活動を取り入れ、グループ活動と個別支援活動の両輪のなかで参加児にとっての有効な支援を果たすことが可能となったと考える。

この点からみて、子どもの実態に応じてグループ活動、個別支援活動の場を使い分けることができるような体制づくりが必要であると考える。

3．学校との連携の必要性

ある参加児が「学校に行きたい」と考えだし、親と相談した時、親から「今までうちの子が相談室に行っても何にもしてくれなかった。ただプリントを渡され、それをやって帰ってくるだけでした。そのような状態で学校に行ったら、子どもがせっかく学校に行きたいという気持ちをもって学校に行ったのに、傷つけられて帰ってくるのではないか。教室に行くことを担任に話をしても、気分よく子どもが入っていける状態を整えてもらえるか心配です」との思いが出されたことがあった。この話をとおして、あらためて学校との連携の重要性を感じた。

学校外支援と当該学校との連携を密にすることで、「子どもが学校に行きたいと言ったら戻れる状

態を整える」のではなく、「いつでも子どもが戻れる状態を整えておく」状況を作り出すことが出来ると考える。

「みんなでチャレンジ（第一期）」では、学校との連携は部分的にしかとることが出来ず、今後の課題として残された。

4．心理面、学習面、生活面からの多角的なサポートの必要性

「みんなでチャレンジ（第一期）」の活動においては、参加児の多数が中学3年生ということもあり、学習面でのサポートも必要となった。当初は、個別支援において、主に心理面のサポートを重視していたが、高校入試が近づくにつれ学習面のサポートが児童・親の間で重要視されるようになり、心理面への支援が後回しになったケースもあった。また、心理面のサポートを重視しすぎたあまり、学習面に関して不安を残したケースもあった。

児童の実態をきめ細やかに把握し、心理面・学習面・生活面等からみて対象児にとって今一番必要な支援はなにかを吟味し、より具体的な支援内容を検討していくことが大切となる。とりわけ、心理面と学習面のバランスの取れた多角的な支援を行っていくことが重要であると考える。

【謝辞】

「みんなでチャレンジ（第一期）」に参加した6名の子どもたちから、我々スタッフは多くのことを学ぶことができた。6名の子どもたちとその保護者に深く感謝したい。

教育学部生（当時）の金野愛、佐々木佳穂、荒川由子、熊谷絵美、及び教育実践総合センター研究協力員（当時）の田村巳香の皆さんにはスタッフとして参加していただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

なお、本報告の概要は、2002年11月に行われたシンポジウム「不登校へのアプローチ」（岩手大学教育学部附属教育実践総合センター主催）において佐藤歩がシンポジストとして発表した。また、2003年4月からは新たな参加児を迎えて、「みんなでチャレンジ（第二期）」として活動を続けている。

【参考文献】

(1)　平成14年度シンポジウム報告集№2　岩手大学教育学部附属教育実践総合センター、2003. 10.
(2)　今後の不登校への対応の在り方について(報告)不登校問題に関する調査研究協力者会議、2003. 3.
(3)　青木省三　思春期こころのいる場所　岩波書店、1996.
(4)　田中治彦　子ども・若者の居場所の構想　学陽書房、2001.
(5)　久田邦明　子どもと若者の居場所　萌文社、2000.